

重要文化財

門 脇 家 住 宅



大山町商工観光課文化財室

門脇家住宅の概要

門脇家は平家の流れを汲み、その祖先は美濃の国に居住し、織田信長に仕えて羽柴秀吉の下で備中高松城の攻めに加わったと伝えられている。現在の所子の地に住むようになったのは17世紀後半であり、初代三右衛門(1695没)、二代目嘉七(1727没)が経済的基盤を築いた。18世紀前半には数十町歩の田畑を所有する経済力と社会的信望を持つまでに成長し、宝暦七年(1757)には三代日本右衛門秀盛(1785没)が鳥取藩から阿弥陀川以西の汗入郡西構の大庄屋に任ぜられ、苗字帯刀を許された。

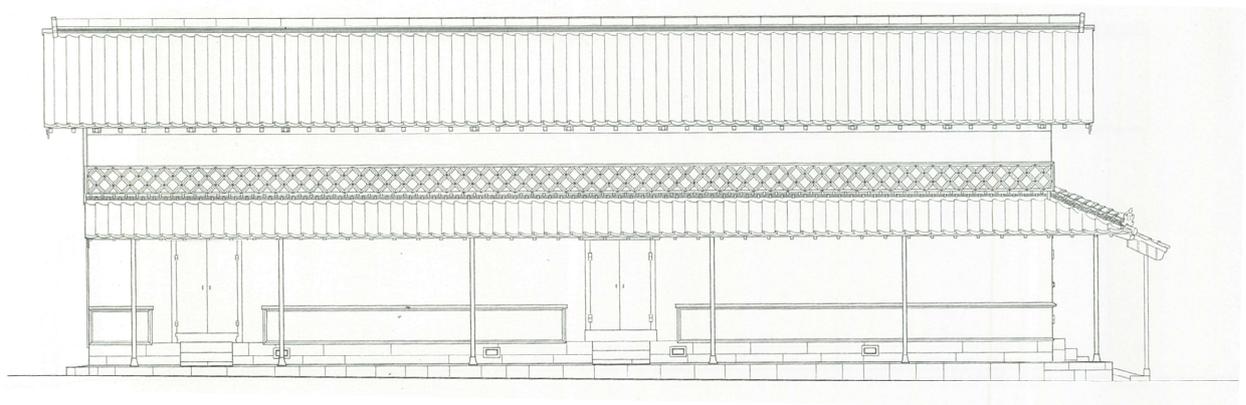
以来、六代日本右衛門孝秀(明治5年没)に至るまで四代にわたって大庄屋に任ぜられた。

門脇家住宅の主屋は、三代目の本右衛門秀盛が大庄屋に任命されてから12年後の明和六年(1769)に建てられたものである。豪農の居宅であると同時に大庄屋の役宅としての性格をもった造りとなっていることが大きな特徴である。

面積3381.8㎡の広大な敷地の中央に、南北方向に棟を置く茅葺で寄棟造の主屋を配置する。正面には広い前庭空間を設け、主屋の周囲に土蔵等の付属屋を配置する。

主屋は間口11間、奥行7間で、土間には太い梁を4段縦横に組み上げた豪壮な架構が見られ、最上段の梁の上に合掌を組む「宇立造」と「又首組」を折衷した「半小屋造」となっている。間取りは幕末から明治初期の頃に拡張されて現在12室を数えるが、原型は3室が3列に並ぶ9間取りとなっており、拡張部分を除いてほとんど改造されていない。広間及び座敷は土間との境を板戸で仕切るが、座敷との間には大庄屋の風格を示す5本溝の敷居が設けられ、片方に板戸を寄せて開放できるようになっている。また、広間と仏間には僧侶や客人を迎えるための出入口として利用される式台が設けられているのが特徴である。

主屋の南側には、農村の中にあって茶道の文化を取り入れた茶室と客用の湯殿・雪隠が別棟で付属しており、豪農の生活と古い趣きをそのまま伝えている。



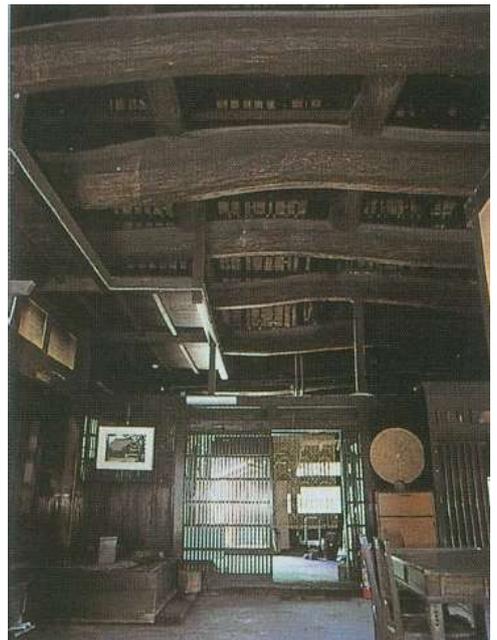
米蔵



かぎの間（奥座敷）



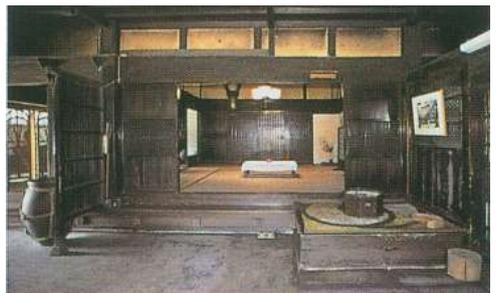
庭園（嘉永三年頃）



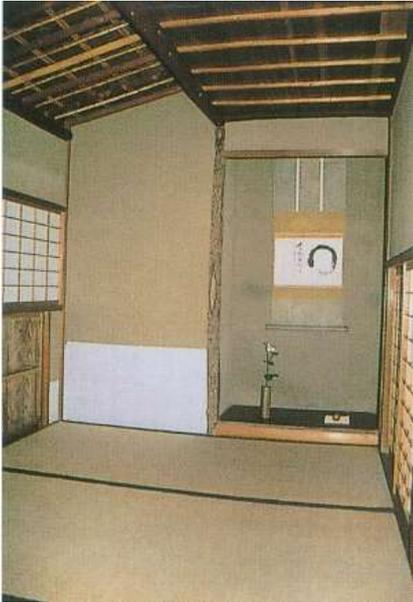
土間



土塀



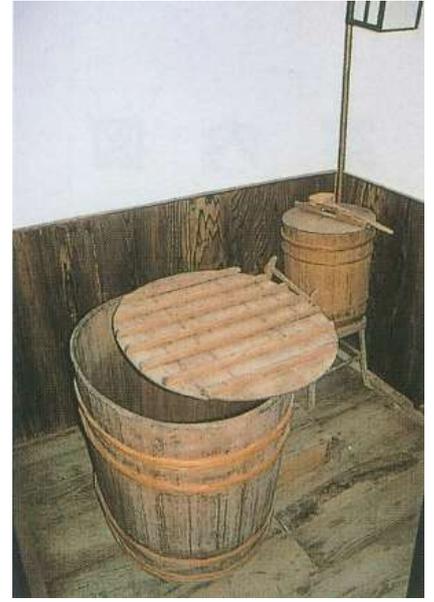
座敷



茶室（静寿庵）
文政年間の建築



せっちん
雪隠



ゆどの
湯殿



ろじ
露地



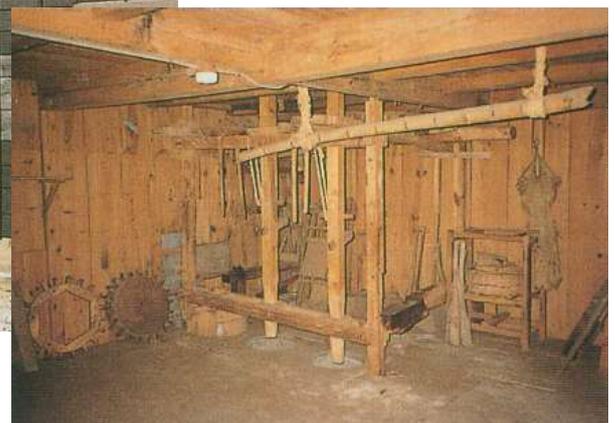
検査場

各村で収穫され集められた米の品質を検査した。



水車小屋

水車の動力を利用し、そば等を打っていた。





米蔵



新蔵

○基礎等に用いられた石材

安山岩

門脇家の主屋や新蔵、米蔵等の基礎石には、集落の東を流れる阿弥陀川の河川敷で産出される「阿弥陀川石」、「大山石」と呼ばれる安山岩が用いられた。風化による浸食が少なく、近くで産出されるため、井戸の石積、石橋、洗い場などにも広く用いられた。

閃緑岩

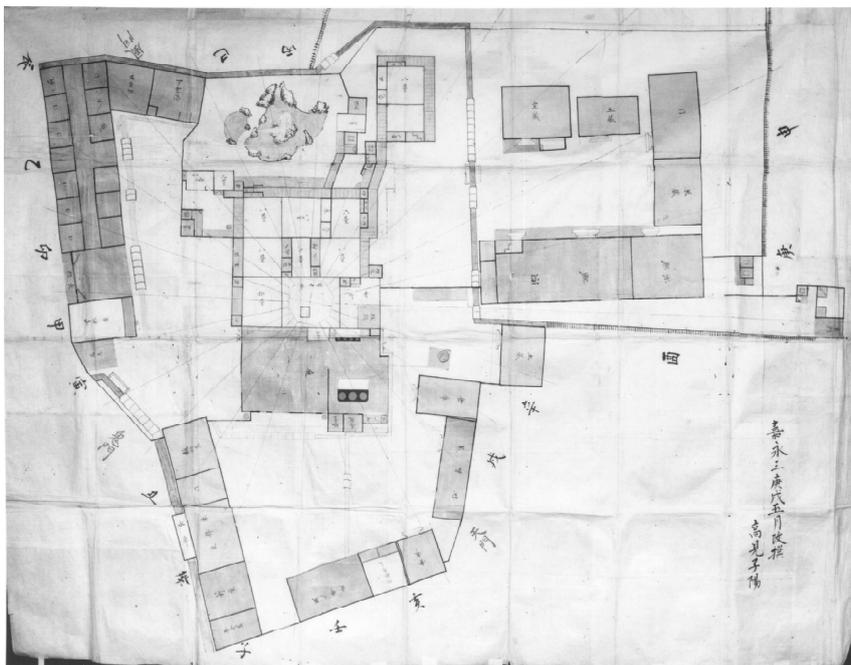
新蔵の入口にあたる戸前には、4段の石段が据えられている。戸口にあたる部分と石段の上部には、目が細かい閃緑岩（黒御影石）が用いられていることが特徴である。また閃緑岩は表門の基礎石や庭先に降りる「靴脱石」に利用された。



閃緑岩の戸前石

棟石

棟に利用される切石は、「棟石」と呼ばれ、伯耆から出雲地方にかけて見られる伝統的な棟積の形式である。棟石の長さは1本63.8cm（2尺1寸）で、門脇家では来待石が用いられている。棟石の頂部は鑄（しのぎ）状に、底面には瓦に据えやすくするため、湾曲した形に加工されている。



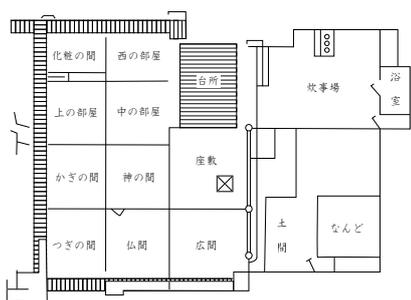
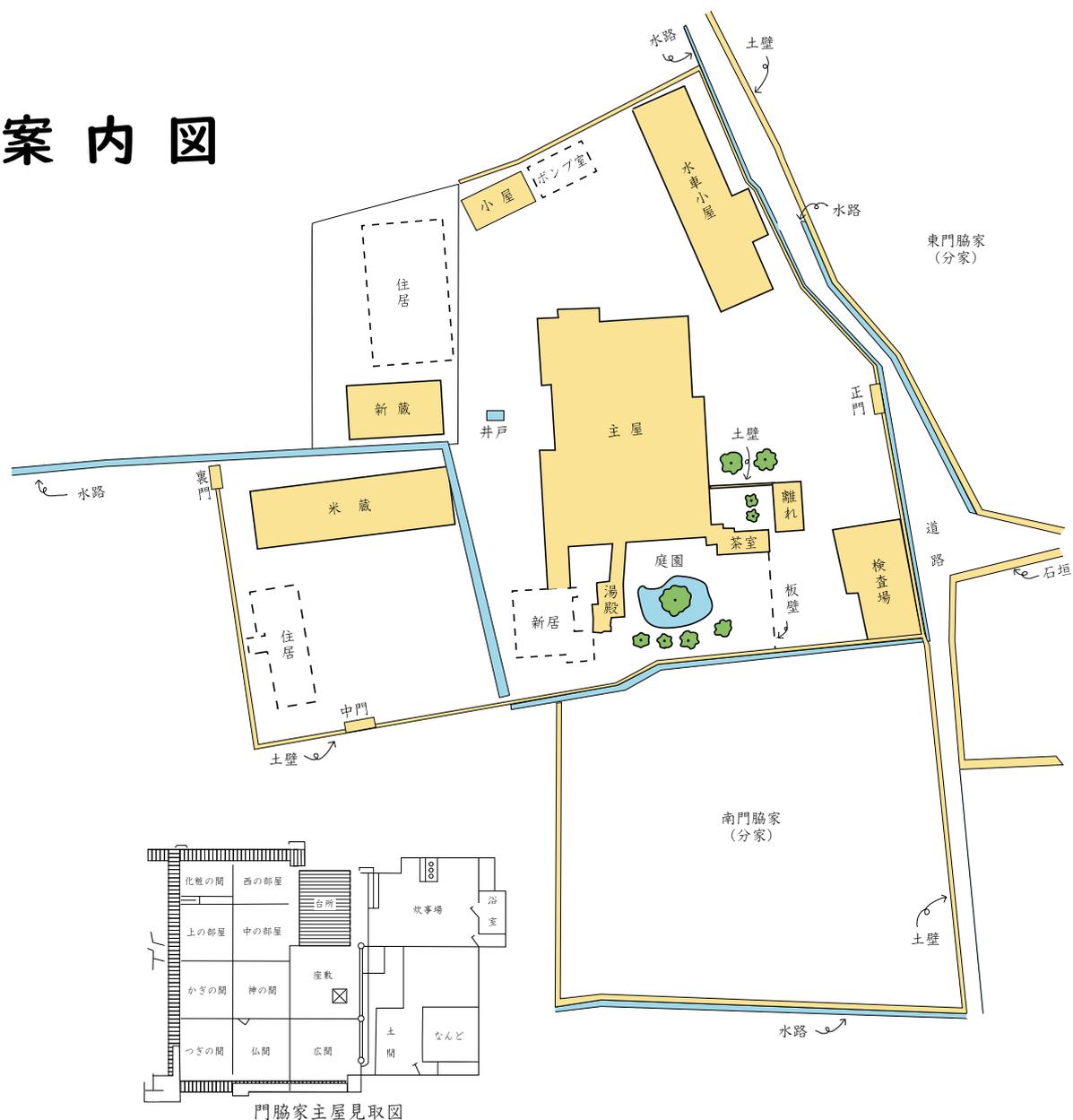
嘉永三年家相図（1850）



居宅棟上ケ一式

明和六年（1769）に主屋が建築された時の普請文書

案内図



門脇家住宅指定物件

名称	員数	建築年代	構造及び形式
主屋	1棟	明和六年(1769)	桁行22.2m、梁間16.5m、寄棟造
米蔵	1棟	明治25年(1892)	桁行19.4m、梁間5.9m、土蔵造
新蔵	1棟	大正3年(1914)	桁行8.9m、梁間5.6m、土蔵造
水車小屋	1棟	19世紀後半	桁行23.9m、梁間5.0m、切妻造

附属指定物件

名称	員数	名称	員数
湯殿・雪隠	1棟	池	1ヶ所
茶室(南面板塀付属)	1棟	井戸	1ヶ所
検査場	1棟	普請文書(主屋)	2冊
小屋	1棟	棟札(米蔵)	1枚
表門	1棟	普請文書(新屋)	1冊
裏門	1棟	家相図	1枚
東面、北面、南面土塀	3棟	宅地	3381.80㎡

所在地：鳥取県西伯郡大山町所子360番地